

中国の素質教育と中学校美術教育に関する一考察

麻 麗娟*・福田 隆眞

On the Talent Education and the Secondary School Art Education in China

MA Li-Juan* and FUKUDA Takamasa

(Received July 20, 2007)

キーワード：中国、素質教育、美術教育、中学校教育

はじめに

現代中国教育の目的は、『中華人民共和国教育法』(1995年)第5条の中で次のように規定された。教育は社会主義近代化の建設に資することに努め、労働生産と結びつけ、徳、智、体、美、労いずれの面においても全面的に発達した社会主義事業の後継者を育成することとしている。素質の全面的な発達を基礎とする教育方向を法的に定めることにより、教育方針が明確化された。しかし、社会の変化に伴い、改革開放や市場経済の導入により、経済成長が著しく発展している現在、「拝金主義」、「個人主義」が蔓延し、子どもの道徳意識が希薄化し、他人、社会へのボランティア奉仕精神が失われている問題が教育界で大きな憂慮すべき課題となった。

このような背景の下で、教育改革の一環として、子どもの全面的な素質を高めることを目指す「素質教育」が唱えられた。美術教育も素質教育に含まれ、審美素質教育において、美術教育がどのような役割を果たすべきか、素質教育をどのように実施すべきかが今後の重要な課題となっている。

本稿ではこうした中国での素質教育の下での美術教育について、中学校での美術教育の現状と問題点を一考する。

1 美術教育理論について

現在の美術教育理論の基盤となっている考え方にはいくつかがある。美術教育は理論が先行して生まれたものではなく、美術の歴史的変遷によって専門教育としての美術教育に理論が裏付けられ、それらの専門教育から小中学校を主とする普通教育に美術教育の考え方が導入されてきた。そして美術教育理論は特定の地域や国によって独自性を発揮するものもあるが、20世紀以降は理論が世界中に流布し、相互に影響したり融合したりしながら今日の美術教育の考え方を形成しているといえる。

そうした経緯と観点から、現在の美術教育理論を便宜的に以下のように分類し、その概

*山口大学大学院東アジア研究科

要を記す。

① 技術、技能主義の思想

日本では明治初期において臨画やお手本主義が導入された。ここでは、表現技術の習得が主目的であり、技術の習得の延長に技能の獲得が行われる。技術は伝達可能な客観的方法であり、技能は主観的に獲得する内容である。

美術教育では表現技術の習得と技能の獲得という点で歴史的には早期からこの方法を取り入れて来たといえる。そして表現としては写実であり、特に西洋の絵画、彫刻の分野での専門教育としての美術教育においては写実表現の習得が重視されてきた。東洋においては絵画では近代に至るまでは、客観的写実的表現ではなく主観的表現が進められてきた。工芸分野においても写実的な表現よりも装飾的図案的表現が行われてきた。しかし、19世紀後半においては西洋の客観的写実的表現が東洋に影響を及ぼし、教育制度と同時に美術教育においても写実的表現が流布し、技術、技能を重視する美術教育が広まったといえる。

また、中国においては工芸の分野において技術習得は重視され、伝統的な工芸技術が歴史的に長く受け継がれてきた。そういう意味では中国では技術、技能重視の美術教育が古来よりなされてきたといえる。

② 創造主義的思想

チゼック、山本鼎などの自由画教育をすすめた考え方。表現技術よりも内面の心理的欲求による表現を重視する。創造主義的な美術教育において、子どもは固有の創造的な能力をもっているという児童観に基づいて、大人の絵を教え込むのではなく、自由な表現を保障すべきだという美術教育の考え方である。

この考え方は、西洋において印象派以降に出現したと考えられる。前述の写実的表現は印象派によって変貌を遂げることになった。それは1840年頃の写真技術の発明と油絵の具のチューブの開発によって、従来までの絵画の記録的役割が写真技術の発明により写真の機能へ移行し、同時に油絵の具の開発により画家の戸外での制作が可能となり、写実的表現から心象的表現へと変貌していった。この過程において非対象表現が出現し、創造的表現が美術に求められるようになった。美術表現のこの創造的機能は美術教育に取り入れられ、創造性を美術教育の機能とする考え方が20世紀になって浮上した。

③ 造形主義的思想

前述の創造的表現の一つの方法として造形要素の視覚言語による再統合、再組織による表現が1920年ごろからバウハウスや構成主義、ロシアのヴフテマスなどによって確立されてきた。造形要素や視覚言語は主に機能的表現のデザインの分野を特定されるが、基本的にはイッテンやロドチェンコのように造形全般の基礎と捉え、専門教育だけでなく普通教育の美術教育にもその考え方が広まった。

現在の美術教育の考え方は創造主義的な思想と造形主義的な思想である。技術、技能主義の思想の臨画による美術教育は歴史的な事実となっていて、現在はほとんど行われていない。また、技術、技能だけでは美術教育とは有り得ないと考えられている。西洋の印象派の出現以後は美術教育が創造的表現を担うようになってきた。それにより、2の創造主義的な思想が確立されて来た。また、産業の発達と並行して、19世紀末からモリスの美術工芸運動やその後のアール・ヌーヴォー、ドイツ工作連盟の運動を経て、バウハウスが出現することとなった。そこには造形要素と視覚言語の系統化が行われ、美術教育の中で

もデザイン、工業デザインの分野において、造形主義的な考え方が確立していった。

現在の世界の美術教育の考え方は創造主義と造形主義が混在していると言える。現在の日本の教育課程では創造主義が重視されている。中国では、技術、技能主義から創造主義に移行しようとしている段階にあると言える。

2 素質教育思想の提出

中国の学校教育システムは就学教育、初等教育、中等教育及び高等教育によって構成されている。そのうち、初等教育と中等教育つまり小、中学校教育は教育の基礎であり、基礎教育とも呼ばれている。1980年代から全民族の素質を高め、より優れた人材をより多く創り出すことを目的とする教育改革が行われてきた。「素質教育」という概念は、1980年代中期に提出され、「受験教育」と「素質教育」この二つの概念に対する論争は1990年代において多く出された。また、教育思想は「受験教育」から「素質教育」に転換するべきだとの論争は1990年代から始まり、1995年以後、この論争は更に活発化してきた。1993年2月12日中共中央、国務院による『中国教育改革及び発展綱要』では、「小、中学校は「受験教育」を改め、国民の全面的素質を高め、すべての子どもに対し、全面的に子どもの思想道德、文化知識、科学技術、労働技能や身体、心理素質を高める教育へと転換し、子ども達の生き生きとした活発的な発達を促すべきである。」と明示された。^(注1)

基礎教育段階においても、長い間、進学率を重視しがちな傾向が続いていた。教育内容、教育方法及び各種の競争体制、政策指針などのすべては、受験のためのものだと見られ、様々な問題を生じていた。主に以下のようなことが指摘されてきている。

- ① 受験教育は少数のエリートを育てる選抜教育であり、教育の目的は入試試験に対応するためにある。
- ② 教育内容は学科中心になり、子どもの全面的知力の発達や道徳の育成を軽視している。
- ③ 教育方法は教師の一方的な教え込みによって、子どもの自発的な学習意欲が抑制され、勉強への意欲を喪失する子どもが増えてきた。
- ④ 授業に対する評価はテストの点数だけで評価の唯一の基準として考えられている。

以上を背景として、また、経済の発展に適応するため、より優れた人材、全面的能力を開発する素質教育が積極的に取り込まれている。この素質教育とは、主に以下のような内容を指している。^(注2)

- ① 道徳素質教育：社会主義国家、中国共産党を愛することを主とする政治思想教育過程である。子どもは国家、民族に対する責任感、使命感を培い、個人と国家、社会、集団、他人との関係を正しく理解し、規律、法律を守り、他人との協力や互いに助け合う精神を養い、自尊心を持ちながら他人を尊重することなどが求められる。
- ② 知力、能力素質教育：基礎知識を教え込むのではなく、校内での学習や校外活動を通じて、子どもの自己学習能力、観察能力、記憶能力、思考能力や創造能力を開発し、子どもの自発的な学習、研究、探究精神を養う教育過程である。
- ③ 心理素質教育：子どもの健康な心理や健全な人格を形成するための教育過程である。子どもが豊かな想像力と鋭い思考力だけではなく、明るい性格、良い人格、社会適応能力、忍耐力などの育成などが重視されている。
- ④ 審美素質教育：子どもに豊かな感性や、美に対する鑑賞力や美を創造する能力を養わ

せるための教育過程である。

- ⑤ 身体素質教育：子どもの体質を增強し、身体健康レベルを高めるための教育過程である。
- ⑥ 労働素質教育：子どもに労働の知識や技能を身につけさせるための教育過程である。

現在、国際社会の激しい競争において、経済の競争、国力の競争、科学技術の競争などがあるが、結局、人材の競争であり、国民の素質の競争であると思われる。素質教育は個人の発展、社会の発展に応じる教育思想であり、時代や社会の変革に伴う人材を育成する教育方針はこれからの世界の教育発展の成り行きと考えられる。しかし、素質教育は受験教育に対する否定とも言えるが、受験教育を完全に否定するわけではない。素質教育を円滑に実施するため、現行の受験教育における継承と発揚する部分及び問題点を明確にする必要があると考える。

3 素質教育の実施と美術教育の役割

素質教育が推進されるとともに、美術教育は人の素質を高める面で独特な役割があることを認識している人がますます増えている。特に、美育は教育方針に組み入れられて以来、美術教育はかつてないほど重視されており、新しい発展期を迎えている。美術教育は素質教育を推進するにあたり、次のような役割を果たしていると考えられる。

- ① 美術教育は、子どもの創造力を発揮させることができるのが大きな特徴である。

人間と動物との間の著しい相違の一つは、人間は創作をするが、動物はしないということである。子どもの創造的成長、創造的発達を目指す教育は多くの美術教育者が注目するところである。アメリカの美術教育家ローウェンフェルドは『美術による人間形成』によって、美術教育においては、美術は目的に対する手段としてのみ用いられるもので、それ自体が目的ではない。創造性がどこで発揮されようとも、人々がいつそう創造的になるように創作過程を利用することが美術教育の目的である。また、美的経験を通じて、よりいつそう創造力のある大人になっても、それを生活や職業にうまく利用していくようになったとすれば、美術教育の主要な目標の一つは十分に達成されたことになるのである。要するに、ローウェンフェルドは、美術教育を通して子どもの創造性や創造力を育てることが美術教育の最高の榮譽であると考えていた。

- ② 美術教育は生徒の心身を健康的に成長する面においても重要な役割を果たしている。

中学校段階は生徒の心身を成長し、知識を貯える時期であり、人生観や世界観を形成する重要な時期でもある。12歳から14歳という中学校段階において、心身ともに大きく変化する時期には、自我の意識を強く持つようになり、他者や異性などの存在が強く意識されるなど、心理的にも大きく心が揺れ動く時期である。こうした思春期の年代だからこそさまざまな美術活動を通じて、主体性を身に付けたり、論理的な思考力を身に付けたり、感性を広げたりすることができる。

中学校美術科の授業で生徒達が対象物の形態、構造、色彩などを観察し、造形要素で表現し、また各自の創造力で作品を作ることができる。この段階の学校美術教育は造形訓練をするとともに、生徒の思考力、観察力、また情緒的、知的能力が養われる。作品と制作過程によって、感性的な認識から理性的な認識に切り替え、知的能力や感情の豊かな表現も成長していくのである。中国近代の作家魯迅は「美育は道徳を補佐することができる」

と言った。言い換えれば、美術教育を通しての美育は感情の陶冶、豊かな人生観を持つ機能があり、子どもの心身を健康的に成長させる役割を果たしている。

素質教育は子供を中心にして、各分野の知識を把握することを手段とし、子供の個性や能力を発展させて、高尚な人格を形成することが目的である。美術教育は潜在的機能も持っている。それは、子ども達が習得した美術の基本知識が美術作品の中で表現されていることのみならず、個人の潜在力を変えることが可能になる。この潜在力は将来の生活や仕事に役に立つことができる。そのゆえに、美術教育の持つ機能は素質教育にとって、有効的に重大な役割を果たすことができる。

4 現在の中国中学校美術教育の現状と問題点

美術教育は人や社会の発展との関係が緊密である。中学校の美術教育は美術の作品制作や鑑賞活動を媒介としながら、子どもの創造力や表現力を育て、広い意味での人間形成をするという教育活動である。子どもの全面的な発達を目指す目標と素質教育の目的とが一致することであると言える。しかし、現在、中国の美術教育の現状として、素質教育との相違点があり、主に以下に示すようにいくつかの問題がある。^(註3)

- ① 美術教育は学校教育の添え物になっている。学校には美術教員や基本的な美術設備が揃えられておらず、美術科の授業はあってもなくてもよいように見られる。美術科目は授業科目の中でただの装飾科目にすぎないように見做されている。中学校の美術教育の多くがこのような状況にあるので、美術科としてのこの科目の価値は十分に評価できなくなる。
- ② 学校美術教育で専門の美術大学に志望する少数の生徒達を集め、名目上は美術の部活やサークル活動と言われるが、本来は受験勉強の授業である。
- ③ 美術の授業の内容が主に伝統的技法、技能を伝授されているに過ぎない状況にある。美術教育の役割や在り方などを十分に認識されておらず、その機能が活用されていないため、絵を上手に描けることが中学校美術教育の目標であると理解されている。
- ④ 授業方法が単一である。従来の授業方法は伝授を主とした授業が優先されているので、生徒はある程度美術知識や技能を修得しているにも拘わらず、生徒の主体性や創造性が十分に発揮できないことが現状である。
- ⑤ 美術科と他の科目との関連性がなく、生徒の総合的思考と総合的探究能力を育成することができないのが現状である。
- ⑥ 教科書中心で、美術授業の内容は制約されている。教科書以外の内容、校外での授業などほとんど行われていない。

以上のような問題が挙げられ、第2と第3の問題が現場でもっとも多く見られる。これが専門の美術教育と言えるだろうか。中学校段階での美術教育は美術を通しての審美教育、創造力や表現力を通しての人間形成などの美術による教育が目的であるにもかかわらず、現状は、美術そのものの教育が行われている。実技や技能の練習を主として、絵画の教学が美術教育に替わり、素質教育とは異なり、美術教育の多様性が無視され、中学校美術教育としての本来の役割が果たせなくなっている。

以上のような問題点に対して、素質教育を確実に実施するため、また、中学校美術教育の本来の目的を達成するため、以下の面で美術教育の強化を図る必要があると考える。

まず、美術教育に関する考え方の偏差を是正することが問題の鍵と考える。つまり、教育者達は美術教育に対する本来の目的の認識が重要である。そのため、政府の教育方針として、美術科を重要視することが大切だと思われる。そして、「時代や生徒の変化への対応」は美術教師に求められている。定期的に美術教師に対する研修会を行うべきだと考える。教師自身に自ら考え自ら学ぶ姿勢がなくてはこれからの生徒達に対応できなくなる。美術に対する新しい考え方や理論、また実践的研究成果をタイムリーに多くの美術教師に紹介することが極めて重要だと思われる。

次は、授業内容の改革は素質教育を順調に実施するための保証であると考え。これまでの技能中心の絵画教学を改め、多方面での美術授業ができるように授業内容を工夫するべきである。例えば、中学校段階において、中国水墨画、西洋の油絵、版画、陶芸など、様々な美術言語を使い、子ども達に美術の違う領域が楽しめるような授業を行う。また、臨画主義の授業方式から子どもの発想、着想を重視していくような授業方法も選択するべきだと考える。このほか、授業内容において、美術科と他の科目や社会に関する総合的内容、関連性も配慮しなければならない。

また、適切な授業方法が素質教育を実現できる重要なルートであると考え。美術教師が工夫された様々な授業を通して生徒に学ぶ力をつけてもらうことが求められる。また、美術科の授業での表現の多様性を学ぶことで、様々な個性や文化を認める能力を育て、新しい時代の中で異なる文化や個人を尊重できる力を育むことが素質教育の目標の一つに繋がる。

さらに、授業内容は教材や指導により、制約される場合があるので、美術の授業において利用できる課程資源は豊富で、新しい授業内容として望まれる。これらの教科書以外の授業内容、校外の授業内容は各地域、各学校によって様々である。具体的にいえば、公共文化施設としての美術館、博物館、民俗館など、また、各地の豊かな文化遺産や自然環境なども含まれる。中国各地の社会的、経済的発展が異なり、美術課程資源を充分に開発し、利用することは難しいのが現状であるが、現在の授業条件と生徒の状況に応じ、適切に利用することが期待されている。

5 今後の中国中学校美術教育の課題と方向性

現在、素質教育と対応して、新しい美術課程改革が中国全土で順調に発展させることが大きな課題になっている。新しい美術課程改革に関する美術教員の研修、授業方法や授業内容などについて、日本の美術教育の実施現状を参考にすることが考えられる。また、現在の中国の学校教育の教育環境には大きな格差があり、美術教育の環境においても人材、教材が十分ではない学校が多い。実際には、中国沿海部では新しい美術課程標準による教育が奨励されているので、教育環境の整備も進んでいる。しかし、内陸部では経済的状況も発展途上にあり、教育環境の整備が遅れている。そうした状況から、今後の中国中学校美術教育の課題として、もっとも注目するのは美術課程資源の開発と利用することだと考える。

現行の素質教育は表層的な学習だけではなく、人間の素質そのものを伸ばす教育である。日本では昭和52年(1977)の学習指導要領の改訂以来、「ゆとり教育」が実施されてきた。これは児童生徒の主体性を重視し、個性や創造性を育成することを目的としたものである。

そのために教科の学習内容は精選、厳選されて、約3分の1の学習内容が削減された。また、平成10年(1998)の教育課程の改訂では、総合的な学習の時間が導入され、教科の時間数は削減された。

中国の素質教育は個性や創造性を育成するという点では、日本のゆとり教育と類似した部分もあるが、実際にはゆとり教育と同じように理解するにはいかないと考える。日本のゆとり教育では、教育内容の大幅な厳選が行われ、そのために学校教育での学力低下が生じた。また、教育方法においても児童、生徒主体の学習方法を重視しすぎたために、子ども達の格差、学校格差、地域格差を生じることとなった。これに対して、中国の素質教育は教育内容を削減したのではなく、総合化しようとするものであり、スコープ(教育領域)を重視している。総合化は教科の中で従来の分野や領域を超えて行われ、また、教科間でも総合化が行われている。そして、基礎学力を重視し、従来の硬直化した知識や技術の習得だけでなく、柔軟に対応できる学力を習得することを促しているので、学力の低下を回避しようとする政策であると考えられる。

今後の中国では、著しい経済の成長に伴い、素質教育という人材能力開発の教育思想が近い将来で更に実施されてくるものと考えられる。そうした素質教育全体の流れのなかで美術教育のもつ個性の表現や創造的な思考が他の教科と有機的な関係を保ちながら進められることが期待される。

注

- 1 http://www.eol.cn/guojia_3489/20060323/t20060323_49571.shtml
- 2 白解紅 周晩田 『WTOと中小学校素質教育』 湖南人民出版社 2003
- 3 これらの問題は、筆者の麻の教師としての経験と、2006年に麻が中国で聞き取り調査したことと、その他文献資料によるものである。

参考文献

- ・ローウェンフェルド著 竹内清 堀ノ内敏 武井勝雄共訳 『美術による人間形成』 黎明書房 1963
- ・白解紅 周晩田 『WTOと中小学校素質教育』 湖南人民出版社 2003
- ・劉家豊 『素質教育概論』 中国档案出版社 2001
- ・中華人民共和国教育部 『全日制義務教育美術課程標準(実験稿)』 北京師範大学 2001
- ・福田隆眞 「中国、台湾における九年一貫教育課程と美術教育について」 大学美術教育学会誌 38号 2006
- ・麻麗娟 福田隆眞 「中国における教育課程と美術教育課程の変遷について」 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要第20号 2005
- ・福田隆眞 「ヴフテマスの基礎教育について」 山口大学教育学部研究論叢第38巻 1988
- ・福田隆眞 「バウハウスとヴフテマスー基礎教育の意義について」 山口大学教育学部研究論叢第39巻 1990